

# 2025年度東京海洋大学海洋生命科学部・海洋資源環境学部 私費外国人留学生特別入試学力検査問題《日本語》（1／2）

※ 答えはすべて解答用紙に書きなさい

① 以下の文章を読んで、（ ）の中に適当な助詞を入れなさい。

（配点 10 点）

2024 年 1 月 1 日（ ）午後 4 時ごろ、能登半島（ ）震源とする地震（ ）発生した。

大津波警報が発表され、各地の沿岸（ ）津波（ ）到達した。

② 解答欄の（ ）の単語を、文に合うように形を変えて、あるいは形を変えずに、\_\_\_\_の上に書きなさい。

（配点 10 点）

2024 年 1 月 2 日、日本航空の飛行機が\_\_\_\_\_直後に、海上保安庁の飛行機と\_\_\_\_\_。  
（着陸する）（衝突する）

この事故で海上保安庁の飛行機に\_\_\_\_\_6 人のうち 5 人の死亡が\_\_\_\_\_。  
（乗る）（確認する）

一方で日本航空の乗員・乗客は全員、\_\_\_\_\_避難した。  
（無事だ）

③ 次の文章は『体験格差』という本の「子どもの必需品とは何か」という部分です。この文章を読み、問 1 から問 7 に答えなさい。

（配点 80 点）

社会政策学者の阿部彩氏は、2008 年の著書「子どもの貧困」の中で、日本の一般市民においては、イギリスやオーストラリアといったほかの社会に比べて、「子どもが最低限にこれだけは享受するべきであるという生活の主タイ値が低い」と述べている。

阿部氏が紹介するイギリスの調査では、「趣味やレジャー活動」(80%)、「水泳(1 ヶ月に 1 回)」(78%)、「1 週間以上の旅行(1 年に 1 回)」(71%)など、子どもたちの様々な「体験」に関わる項目について、大多数の大人が、子どもたちにとって必要なものであると回答している。その一方、阿部氏自身が 2015 年に日本の大人を対象に行った調査では、「1 年に 1 回の家族旅行(最低 1 泊)」(30.5%)、「スポーツ・チーム(野球、サッカー等)や音楽活動への参加」(22%)などの項目について、必要であり、すべての子どもが持つことができるべきであるとする回答が、ソウタイ的にかなり低い割合にとどまっていた。

ここからわかるのは、子どもにとって何が「必需品」であるのか?という問い、つまり「たまたまメグまれた家庭に生まれた一部の子ども」だけではなく、「その社会に生まれたすべての子ども」が享受できて然るべきものは何か?という問いに対する答えや考え方が、それぞれの社会によってかなり違うということだ。ある社会にとっての当たり前が、別の社会にとっても同じであるわけではない。

私たち、日本社会で生きる大人たちの多くは、子どもたちにとっての「体験」の機会を、いまだ「必需品」だとは見なしていないのだろう。阿部氏の調査では、泊まりの旅行、スポーツ、音楽活動への参加などについて、「あったほうがよいが、持てなくても、いたしかたがない」、「必要ではない」という回答が大多数をシめている。

もちろん日本でも、自分自身の子どもに対して様々な「体験」を与えたいと願い、実際にその機会を与える親は数多く存在する。だが、それがあくまで個々の家庭ごとの話にとどまっている限り、裕福な家庭に生まれた子どもたちはともかく、低所得家庭の子どもたち、あるいはその他のハンディキャップ<sup>注2</sup>を抱えている家庭の子どもたちは、誰からのサポートも得られずに置き去りにされるだろう。そして、実際に置き去りにされてきたのだ。重要な分岐点は、この社会で生きる大人たちが、「私の子ども」だけではなく、「すべての子ども」に対して、「体験」の機会を届けようとするかどうかにある。「体験格差」をなくそうという意思を、社会全体として持つかどうかにある。

そもそも、日本社会が「子どもの貧困」という課題に向き合い始めたこと自体、それほど昔の話ではない。「子どもの貧困対策法」がセコウされたのは、ようやく 2014 年になってからのことだ。そこから今年でちょうど 10 年が経つが、社会の課題認識という意味でも、必要な対策が十分に立てられているかという意味でも、まだまだ道なかつただろう。

その中でも、「体験格差」への関心や取り組みは、特に不十分だと言える。

（今井悠介著『体験格差』、講談社現代新書、2024 年より一部改）

<sup>注1</sup> 然る：当然である。 <sup>注2</sup> ハンディキャップ：不利な条件

2025年度東京海洋大学海洋生命科学部・海洋資源環境学部  
私費外国人留学生特別入試学力検査問題《日本語》（2／2）

※ 答えはすべて解答用紙に書きなさい

問1 次の①から⑥について、文章の内容と合うものには（○）、合わないものには（×）を書きなさい。（配点12点）

- ① イギリスやオーストラリアの子どもは、様々な体験が必要なものだと認識している。
- ② 日本では、家族旅行が珍しいことであり、子どもが様々な体験をする機会が少ない。
- ③ 日本の大人たちの多くは、子どもたちの体験の機会が必要不可欠なものだと思っていない。
- ④ 日本において、自分自身の子どもには体験を与えたいと思っている親が少ない。
- ⑤ 日本では、最近まで子どもの貧困に対する具体的な対策があまりされてこなかった。
- ⑥ 筆者は、子どもが最低限これだけは受け取るべきだと考える「必需品」に体験の機会を含めている。

問2 下線部\_\_の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。（配点10点）

問3 下線部\_\_\_\_\_のカタカナを漢字で書きなさい。（配点10点）

問4 下線部\_\_について、置き換える言葉として適切なものを、[ア イ ウ エ]の中から一つ選びなさい。（配点8点）

- ① その一方： [ア ところが イ ところで ウ そのため エ その他]
- ② いまだ： [ア 今までも イ まだ ウ 今しも エ またしても]
- ③ もちろん： [ア 本当に イ 当然 ウ 一切 エ 明確に]
- ④ あるいは： [ア 他方では イ ついては ウ または エ それでは]

問5 下線部「体験格差」をなくそうとする意思」とはどのような意思か。30字以上40字以内で説明しなさい。（配点5点）

問6 下線部に「「体験格差」への関心や取り組みは、特に不十分だと言える。」とある。筆者がそのように考える理由を、本文中の記述を基に80字以上100字以内で説明しなさい。（配点10点）

問7 本文は、子どもが様々な体験をすることの重要性を記述している。あなたが子どもにとって重要だと考える体験を、200字以上240字以内で論じなさい。（配点25点）